

NPO

本吉町は自然と共生している素敵な町。

函館市

堀池 舞子 小柳 元樹 中村 かれん NPO 法人アプカス

取材日 2012.11.07

NPO 法人アプカスは2004年に発生したインド洋大津波の被災者支援をきっかけに結成し、「対話・自立・持続」をテーマに活動している。そうした支援活動のノウハウを活かし、震災後すぐに宮城県全域で緊急支援活動を、2011年8月からは「中長期支援活動プロジェクト」で宮城県気仙沼市や石巻市に現地スタッフを派遣して支援を行なっている。

3月11日 14時46分

【堀池さん】 福島県伊達市で工作中に地震にあった。地域を回る仕事だったので、地域のおばあちゃんのお宅にお邪魔していた。地震に驚き「ひゃー！」と叫びながら、皆で外へ避難した。揺れが落ち着いてからテレビをつけてみると、津波の映像が流れている。衝撃を受け「こんな映像、テレビで映しているの?!」と思った。何が起きているのか訳が分からず、車が津波から逃げている映像をただただ呆然と眺めるしかなかった。私の住んでいる地域ではライフラインは止まらず、水道も井戸水で電気も大丈夫だった。部屋の中の物が壊れることはなく、地震の被害は屋根の瓦がちょっと落ちたくらいだったが、車で20分行ったところの地域では家の中がぐちゃぐちゃになって靴で家の中に入らなければいけなかったり、歩いて10分の所では水道が止まったりとライフラインは止まっていた。

【小柳さん】 京都で建築関連の仕事をしていて、3月上旬に時間ができたので、北海道から南下しながら東日本の建築物を見る旅をしていた。岩手県平泉で中尊寺を見学している時に地震があった。ものすごい揺れだったが、「あのすごい揺れにも壊れないなんてすごいな」と昔の人の建築技術に感心した。中尊寺は揺れが落ち着いた後も、ぎしぎしと音を立て10分ほど揺れていた。平泉は内陸にあり、周辺には木造建築物しかない。建物が壊れるなどの被害はなかった。揺れはとても大きかったが、現実味がない。テレビや映画の世界に迷い込んだような感覚だった。中尊寺を離れて民家がある方へ行くと、住民が外へ出て騒いでいた。その様子を見てだんだん「大変なことが起きているのかもしれない…」と感じ始めた。電車に乗ろうとしたが、止まっていて動けない。周辺には歩いている人も少なく、情報を聞き出せそうな人もいなかった。どうすることもできずに歩いていると、舞鶴ヶ池の前に民宿があり、その前で建物の修理をしていたおじいちゃんとお



左：中村さん、中央：堀池さん、右：小柳さん

ばあちゃんを見つけた。「電車が止まっていて帰れないので泊めてもらえませんか」とお願いをし、それから計4日ほどお世話になった。その間は情報が遮断されていたが、普通の生活をしていて。お風呂は入れないもののおいしいご飯を出してもらい、一緒に山菜を取りに行くなどのどかな生活を送った。手回し発電型のラジオで情報を集めたが、津波の情報などは得ることができなかった。3日ほどたち、民宿で一緒に泊まっていた出稼ぎの薬屋さんが「黙っていたら商売にならない！」と言って隣町に出かけていった。帰ってくると「大変なことになっている！」と騒いでいる。ちょっと大きな地震だったのだろうと旅行を続けるつもりでいたが、こうして大変な事態が起きているのだと知った。出稼ぎの薬屋さんが「早く帰った方がいいよ」と言う。薬屋さんから話を聞いた周囲の人たちが騒ぎ出した。民宿の方も「いつまでもいいよ」と言っていたのが、「ここにこのままだら大変だから帰った方がいい」と言い出した。電車が止まっていたのでどうしようか困っていると、その薬屋さんが「片道分ぐらいのガソリンならあるから、一緒に帰ろうか」と言ってくれた。日本海側を通り、幸運にも帰ることができた。関東はどうなっているのだろうと気になり、新潟から関東へ向かった。

気仙沼市本吉に出会った理由

【堀池さん】 私の出身は静岡県で、震災当時はたまたま福島県で働いていた。放射能の値が比較的高い地域だったので、いろいろと考えた結果2011年7月末に退職した。その後は西日本の友達、東北、北海道など、いろいろな所を回った。その時も宮城県の津波被害にあった町の風景を忘れることができず、だんだんと宮城県や岩手県の津波被害に遭われた地域の方たちの事が気になり始めた。津波被害のあった地域を見て「これまで自分は放射能問題のことしか考えてなかった」と感じた。NPO法人アプカスの気仙沼市本吉駐在員となったきっかけは、大学時代のご縁だ。退職後、出身大学の先生と会った。その後すぐに「2011年5月から酪農学園大学の学生を被災地へ派遣する取り組みがあって、アプカスで学生を受け入れたいのだが、受け入れる人がいない。探している」という話を聞いた。大学の先生から「10月から第2回があるので現地で駐在員をやってほしい。学生を派遣するので、3ヶ月間宮城県か岩手県に行ってください」と言われ、最初は3ヶ月間のつもりだったが、気づけば約1年が経っていた。

【小柳さん】 僕は東北で被災し、東京の機能がストップしている状況も見た。しかし、京都へ帰ると何でもない日常の風景が流れていた。友人たちと会って東北や東京の様子を話しても「大変だね」とは言うが強い関心はないようで、僕が抱えている問題意識も伝わらなかった。何か自分ができることはないのかとずっと思っていた。2011年10月、仕事でつながりのあった京都工芸繊維大学の准教授より、NPO法人アプカスという団体が仮設住宅の住環境改善に取り組んでいると聞いたのをきっかけに、短期で被災地に入った。タイミングが合えば何かしたいとずっと感じていて、住環境改善ならばこれまでの仕事のスキルを活かせると思った。短期の活動が終わった後も何かできることがあれば、いつでも行きたいと思っていた。そうしたつながりがあり、2012年5月から駐在員として関わっている。

【中村さん】 酪農学園大学の学生派遣の経緯は、震災が起こり「何かしたい」と学生の声が集まってきたことを受けて、酪農学園学生ネットワーク（酪ネット）という団体の顧問の先生を中心に始まった。2011年5月から1週間ずつ5人1組の派遣だ。その間はもちろん授業はあるが公認欠席を取り、交通費は1万円ほどの補填が付いた。希望者が集められ、私もGW明けの派遣で石巻市を訪れた。派遣されるメンバーは募集をかけて集まった学生なので、学年はバラバラで全員初対面だ。

仙台までのフェリーの中で1日交流して、その後かなり濃い1週間を一緒に過ごした。

あの頃はまだ震災が起きてから2ヶ月ほどだったが、仙台駅に到着してあまりにも普通な状態に驚いた。札幌駅と同じくらい賑わっている。自分たちは荷物が多くて、まさにこれからボランティアに行きますという姿を全面に出しすぎだなと焦った。「仙台市民はこんな感じなんだ…」あまり被災地に来た感じがしなかったが、バスに乗って海岸沿いへ行くと、道路の両脇は瓦礫の山で、信号機も動いていなかった。そうした状況を目の当たりにして、現実を受け入れることに精一杯だった。石巻市での活動は、日々避難所を回って物資配りやニーズ調査だ。石巻市から1日かけてトラックに乗り、一番遠いところは気仙沼市小泉まで物資を配りに行った。お風呂は3日に1度、作業が早く終わった時に道の駅へ急いで向かって入った。ご飯は近くのスーパーマーケットで廃棄の食料をもらってきて、皆で調理して食べた。冷蔵庫はないので、保存ができない。活動の拠点での生活は普段の生活とは全く違い、自分の気持ちを整理する暇もなく1週間動いた。

札幌に帰ってからやっとゆっくり振り返りをし、考えることができた。石巻市で活動をしてから被災地のことが気になり、アプカスの事務局の方と連絡を取り合っていた。「場所は石巻市から気仙沼市に変わるが、活動をやるから来ないか」と誘われて、2週間夏休みに気仙沼市へ来て以来、定期的に通っている。

【堀池さん】 酪ネットの学生はさまざまな子たちが来る。フェリーの中で仲良くなるグループもあれば、まだ緊張しているグループもある。しかし、活動をする中で、だんだんとすごくフレンドリーになっていく。夏に明石工業高等専門学校の学生もインターンに来ていたが、酪ネットの学生たちと同世代ということもあり、楽しそうにお互いに良い刺激をし合って過ごしていた。活動に来た子が「〇〇さんに会いたい」と言ってもう一度来ることもある。住民さんも見たことのある学生が来ると、とても嬉しそう。

仮設住宅での寒さ対策

【堀池さん】 2011年10月から中村かれんさんのような学生を現地で受け入れて、コーディネートしている。その頃の活動は、仮設住宅の寒さ対策だ。学生たちにお手本を見せて、教えながら作業した。作業内容も確定していない最初の頃は、きつと大変だったと思う。私が来てからはすでに周りの方々との関係もできあがっていて、作業内容も決まりマニュアル化されていた。

【小柳さん】僕が2011年10月に短期で被災地に来た時が、まさに作業をマニュアル化しようとしている時だった。ボランティアがせっかく来てくれるのだから、作業内容が分かりやすいように冊子にした方が良いと思った。混乱した当時を思い返すと、現在とは全く違い、体制が整ったと感じる。

【中村さん】仮設住宅の寒さ対策は、小泉中学校の仮設住宅が最初だ。チラシで説明会開催を広報して、集会所で説明会を行ない、希望者を募った。その時は都合がつかない住民の方もいたので、作業をしながら空いた時間にまだ申し込んでいないお宅へ個別で訪ねて取り組みを説明した。

【小柳さん】寒さ対策は女性や学生でもできるように、適性技術（身近で安価な素材を使用し非専門家でも実施可能な技術）と言われる簡単なもの考えた。断熱性能が向上するプチプチシートなどだ。

【堀池さん】簡単と言っても、窓を二重にする内障子の作業は難しかった。カーテンレールを外して、木の棒を打ち込み、またカーテンレールをつける作業を行なうのだが、なかなか同じ穴にとめることができなくて、住民の方にやってもらったこともあった。住民の方々は作業が終わるとお菓子をくれるなど、こちらが申し訳なくなるほどすごく気遣ってくれた。良く見ず知らずの私たちをお宅に入れてくれるなと思った時もあったが、それ以上に寒さに対して不安や心配も大きかったのだろう。

【小柳さん】現在は、去年の対策のメンテナンスや政策提言に備え、データを集めるためにヒアリング調査をしている。

2012年からの新たな取り組み

【堀池さん】2011年12月、寒さ対策の作業が本吉町内の対象としていた仮設住宅の希望するすべてのお宅へ完了した。2012年1月からはいろいろな取り組みを始めている。1つは共同農園だ。畑を借りて、住民の皆さんと一緒に畑をやる取り組みである。20m×15mの敷地を半分だけ使わせてもらって、それを10区画に分けている。参加者にお話を聞くと、「自分で好き勝手にできる場所が欲しかった」と言ってくれる。たまに小さなお子さんと来る参加者の方もいて、今後はもっとたくさんのお子さんが参加できるようになればいいと思う。酪ネットの学生たちが畑仕事をしていると「あんだだち、こんな暑い時に何やってんの」と言ってアイスを持ってきてくれた方がいた。地



宮城県気仙沼市本吉町 共同農園

域特有と言うのだろうか。いつも地域の方々の優しさを感じている。

1月に共同農園の希望調査をした時、「いいね」と言ってくれた方も、いざ始めようと3月にまた希望を聞きに行くと、参加したいという方がいなくなってしまった。畑を貸してくださる方、協力してくださる方々の思いを無駄にしてしまうかもしれない、と思いながらも準備を進めた。実際に募集をかけた時に4の方が希望してくれて、本当に良かった。後からまた1名が追加希望し、今では5の方が畑作業をしている（2012年11月7日現在）。参加者から「畑があって良かったよ」と言ってもらえて、やって良かったなと感じた。次に、住環境改善からコミュニティの再建に関わる活動をしている。殺風景な仮設住宅の集会所の壁面緑化をしたり、暑さ対策でルーフシェードを屋根に設置したり、住環境改善は続いているのだが、7月から「あかりかふえ」というコミュニティの再建に関わる人の居場所づくりを行なっている。普段、集会所などで開催するお茶っこに出てこれない方も夜の時間なら出てこれるのではと考えて、東京の企業と連携して計4回開催した。参加者は100人を超えた地域もあった。内1回は仮設住宅が建っているグラウンドをお借りして、地域の方々にもお手伝いをしてもらい、仮設住宅と地域の方が一緒になれる空間を作りたいというコンセプトで行なった。その後、「あかりかふえ」で地域のお祭りにお邪魔したこともあり、地域の方からは「いつものお祭りと違うね」と言ってもらえた。

【小柳さん】去年はお祭り自粛ムードだったし、お祭り道具が流されてしまい、今年からどうやっていこうと頭を抱えている地域もあった。また、去年のコミュニティセンター再建で集会所が変わってしまった津谷大沢地区は、アクセスしやすい人、しづらい人という状況が変化したこともあったので、それを含めて今後のお祭りの盛り

上げや地域のコミュニティの再編に「あかりかふえ」の企画を絡めることで協力できないかという考えがあった。

これまでの活動を振り返って

【堀池さん】 寒さ対策の時にまだ慣れない学生だけに現場を任せてしまい作業を失敗してしまったことがあった。その時、住民さんから「やってもらわない方が良かったね」と言われ、学生たちも気にしてしまい、住民さんにも嫌な思いをさせてしまった。その失敗もあったせいでなかなかその住民さんと距離を縮めることができずにいたが、2ヶ月ぶりに連絡を取らなければならなくなった。「音楽のイベントをやらせてください」と内容をお話ししてイベントを開催させてもらった。そのイベントがきっかけで距離を縮めることができ、内容もすごく良かったと喜んでもらった。失敗をしてしまったけれども、地域の方と距離を縮めることができたとても印象的な出来事だ。

2011年12月末に本吉町に拠点を構えた。その前の2011年9月から12月までは上沢地区にある集会所を借りていた。コミュニティセンターの再建に取り組んだ津谷大沢地区のキーパソンに相談してこの家を紹介してもらった。以前、学生が来る時期が重なった時に、この拠点で30人はさすがに寝泊まりができないことがあり、「あかりかふえ」を開催した地域のコミュニティセンターを貸してもらったことがある。本当に地元の方々に助けられて、活動を続けることができると感じている。

私はこの12月でアプカスを離れるので、これまで自分がやってきた活動がやりっぱなしにならないように、きちんと次の方に引き継ぎたい。私に関わってきた活動が「あんなことやったね」と地元の人たちの心に少しでも残ればいいなと思っている。振り返ってみると本当にあっという間だった。いろいろなことをやってきたが、まだ自分の中で整理できていない。何かの取り組みが終わるたびに反省する点はあったが、地元の方々がいてくれたから活動をやってこられたのだと感じる。

【小柳さん】 これまで活動してきて、本吉の地域のつながりの強さを感じる。地域の皆さんの場所なので、こちら側がすべてやると過剰な支援になりかねない。何かやる時は必ず住民の方々の参加を呼びかけている。最初はそうした呼びかけに応じてくれるのか不安だったが、地元の人たちはシンプルに「いいよ」と返事をくれる。すぐに10人ほど集まり、「ここまでやってもらって申し訳ないから、手伝うよ」と言ってくれる方々ばかりだ。地域づくりに参加することは、この地域に住

む方々のライフワークなのかなと感じる。また、楽しそうに協力している様子を見てると感化され、それは僕の原動力になっていく。

課題は60代、70代の住民の方々の参加が圧倒的に多い点だ。商工会と外部ボランティア団体が協力して地域振興を進めていて、本吉町の大きなイベントの1つであるマンボーサンバというお祭りの反省会に参加したが、平均年齢が50代だった。また、本吉町と商工会で押しているキャラクターがマンボーなのだが、30年ほど前に商工会が決めたそうだ。こうして外部者がたくさん入ってきている時だからこそ、何か変化があってもいいのではないかと思い、デザイナーに依頼して提案してみたが、若い人は「いいね」と言い、高齢の方は「新しいことはなかなか進まない地域だからねえ」と積極的ではない。地域を盛り上げようとした時、どう若い世代が入れ込める余地を作るのが課題である。集まる世代が偏っているのも、そこに何か世代交代が上手くできていない問題があるのではないかと感じている。次の取り組みではその課題について、何かお手伝いできたらいいなと考えている。

本吉町にはたまたま関わることになった。支援をするということは土地を知ることだと思う。知ったからには、その知ったことを還元して帰りたい。本吉町は自然と共生している素敵な町であり、住民の方々、彼らのスローな生き方が本当に好きだなと感じる。そうした生き方が現代の社会で適合できるような仕組みができればいいなと思っている。これから復興住宅がたくさんできていく中で、林業に注目していきたい。本吉町では林業を生業としてやっている人は少ない。そこを底あげできるようなことができればいいなと思っている。資材が今の日本の流通のシステムのように外から入ってくる仕組みではなく、地域にお金が落ちて、地域の人たちが今まで通りの生活を続けられるような産業構造ができて、本吉の人々がこれまでと変わらず幸せに暮らしていければいいと思う。



撮影：2012.8.14 「あかりかふえ」